令和４年度高等学校総合文化祭書道部門展覧会入賞者

〇最優秀賞（学校番号順）５名

鈴木　愛琉（県前橋２年）
田村和歌菜（前橋南２年）
藤波　颯馬（高経附２年）
池守　亜季（四ツ葉５年）
久保　真優（四ツ葉４年）

〇優秀賞（学校番号順）９名

齊藤　諒佑（県前橋２年）　**萩野　絢衣**（前橋女１年）　**笠原　麻央**（高崎女１年）
松井　　華（高崎工２年）　**金井　遥香**（清明２年）　**黒田　晴香**（渋川女２年）
佐藤　鈴奈（桐市商２年）　**天笠　華菜**（桐市商３年）　**針田　菜央**（四ツ葉１年）

〇優良賞（学校番号順）２３名

吉住　和奏（前橋女２年）　**宮﨑　未歩**（高崎女２年）　**中島　里奈**（高崎女２年）
山口　佑奈（高崎女２年）　**塗本　彩乃**（高崎女２年）　**松本　彩花**（清明２年）
峯岸　沙帆（清明２年）　**丸山　姫依**（清明１年）　**栗原　彩実**（伊商１年）
佐藤　萌夏（伊商２年）　**香川　紗季**（太田女２年）　**大島　彩奈**（太田女１年）
須藤　初綺（太田女１年）　**佐藤　菜那**（富岡２年）　**横山　拓海**（富岡２年）
野口　　蘭（富岡１年）　**曽川　すず**（大間々３年）　**萩原　那優**（高経附２年）
丸山　彩楓（高経附２年）　**河野　円音**（育英２年）　**髙橋菜々美**（共愛２年）
白川穂乃果（共愛２年）　**赤石　真彩**（共愛２年）

〇奨励賞（学校番号順）１５名

山田　愛七（前橋西２年）　**小山　　葵**（勢多農２年）　**長内　理佐**（清陵通４年）
新井　　椋（高崎通）　**秋山　沙希**（吉井２年）　**大平　愛音**（桐生２年）
小暮　由依（興陽２年）　**河合　悠真**（利根実２年）　**吉田　瑞菜**（富岡実１年）
黒澤　煌雅（下仁田３年）　**川島　潤基**（西邑楽１年）　**土田　佳織**（市前橋１年）
萩原　碧彩（健大高崎３年）　**中島　杏奈**（樹徳１年）　**清水　咲歩**（農大二１年）

令和４年度高等学校総合文化祭書道部門展覧会講評

〇最優秀賞（学校番号順）

鈴木　愛琉（県前橋２年）
力業の偏とテクニカルな旁をまとめ上げる緩急のリズムが見事。筆の表裏を自在に操り、起承転結のドラマを魅せた。

田村和歌菜（前橋南２年）
文字の大きさや間隔が揃っていて整然とした美しさが際立っています。石台孝経特有の肉厚で重厚な風格がよく表現されています。一字一字丁寧に書かれており、美しい波磔が作品を華やかにしています。

藤波　颯馬（高経附２年）
これだけの分量を倣書で書くのはとても大変だったと思います。仮名序なので行の変化を付けずらかったと思いますが、見事です。

池守　亜季（四ツ葉５年）
多様な線の筆脈が、流れるような豊かさとたおやかな質感を表現し、妙味あふれる素晴らしい作品です。

久保　真優（四ツ葉４年）
金泥を用い、鋭い線で最後まで集中力を切らさず書き上げています。この古典作品特有の抑揚ある筆遣いもよく表現できています。

〇優秀賞（学校番号順）

齊藤　諒佑（県前橋２年）
書いた言葉への作者の思いがよく伝わる作品です。力強い渇筆や、偏を縮め旁を長く伸ばしたところが見所です。

萩野　絢衣（前橋女１年）
筆の流れが滑らかで、一文字一文字しっかりと丁寧に書けています。行間がきれいに揃っていて、まとまりのある作品です。

笠原　麻央（高崎女１年）
太く堂々と書かれており、とても迫力があります。造像記の特徴ある用筆や形を忠実に臨書しようという姿勢が伝わってくる佳作です。

松井　　華（高崎工２年）
本来はとても小さな木簡の書を、テーマの通り「大きく自由に」書けました。木簡特有の筆遣いに即して、堂々と表現できています。

金井　遥香（清明２年）
練度の高い厳しい線で、最後まで充実感にあふれています。疎と密、密と疎を緻密に組み合わせた格調高い作品です。

黒田　晴香（渋川女２年）
重厚な線の中に造像記特有の鋭さとスピード感を持った作品です、落款の収まりも良いです。

佐藤　鈴奈（桐市商２年）
戦国武将を思わせる力強い大字が印象的。紙面を存分に使い、躍動感ある作品です。

天笠　華菜（桐市商３年）
文字の大きさや強弱のメリハリが素晴らしい作品です。バックに描かれたハートも文字を邪魔せず、調和が取れています。

針田　菜央（四ツ葉４年）
濃墨を用い、羊毫を駆使して、迫力ある作品となっています。最後の「行」の字が特に目を引きます。

〇全体講評
　今年も特徴あるテーマを設定した学校が多く見られました。臨書と一字書を結びつけた前高の作品、漢字の書体の変遷に合わせて様々な古典を臨書した高女の「漢字の書体の変遷」、小さな古典の文字を大きく伸びやかに表現した高工の「大きく自由に臨書する」、多胡碑をミニチュアの石に臨書した吉井、木簡を原寸大の木片に臨書し編綴した興陽の「木簡を臨書しよう」、巨大な黒い紙に白い塗料で迫力たっぷりに造像記を臨書した伊商の「新しい書体に挑戦しよう」が特に印象に残りました。
　また今年は漢字仮名交じり書の作品が例年より少なかったのも特徴です。著作権の関係で流行歌の歌詞などを書くことができないことにもよると思いますが、高校での書の学習の到達点は、漢字と仮名の書の学習を元にした漢字仮名交じり書だと考えます。題材に注意しながら、自分なりの表現にチャレンジしてみてください。その点で、桐商や富岡の漢字仮名交じり書の作品も印象に残りました。
　全国総文の作品を見ると、群馬県ではほとんどお目にかからないような古典の臨書作品に遭遇します。楚簡、中山王方壺、馬王堆帛書などの新出土資料、楊峴、何紹基、鄧石如、張瑞図、傅山、金農、徐三庚などの明清の作家の書です。それらの作品の倣書も出品されています。また、大字仮名作品も群馬県では最近まず目にしなくなりました。皆さんも是非視野を広く持ち、様々な書風やジャンルの作品にチャレンジしてほしいと思います。